

国分寺中間地域遺跡出土繩文時代中期土器について

桜 岡 正 信

1. はじめに

本稿は、国分寺中間地域遺跡報告第1冊に収録できなかった、繩文時代出土土器のまとめの意味で執筆したものである。

国分寺中間地域遺跡は、関越自動車道（新潟線）建設に伴って先行調査したもので、繩文時代前・中期、古墳時代の前・中・後期、奈良・平安時代、中世にわたる1,300基以上の遺構が、幅40～60m、長さ1kmの範囲内に密集して検出された。

当該期の遺構は、住居跡（住居跡様遺構＝址を含む）40軒、屋外埋甕17基、土坑約400基等が弧状に検出され、中央に空間部を有する環状の集落遺跡である可能性が高い。しかし、その遺構検出状況は良好とは言えず、ほとんどが後世の遺構による攪乱を受けている。

⁽¹⁾ 出土した土器は、早期～晚期までみられるが、それらの中で当遺跡検出遺構の主体を占め、出土量の最も多い、報告書分類中第9群～第12群とした、いわゆる加曾利E式の範疇に含まれる一群について、筆者なりの編年観を提示すると共に、当遺跡の位置づけを行ないたい。

その方法は、深鉢の文様構成から分類を行ない、その分類にそくした器形変化及び文様施文順序について検討し、それぞれの特徴を抽出する。さらに各群間の共伴関係を県内資料を中心に検討し、時期区分を行ない、各期に伴うと考えられる異系及び異種土器を位置づける。したがって基本的に当遺跡遺構内出土土器を中心に検討し、その他、県内他遺跡例を検討・比較資料として扱う。

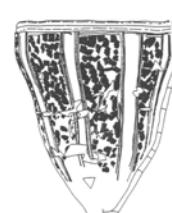
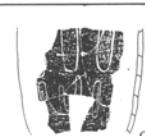
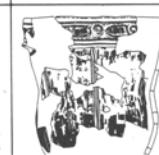
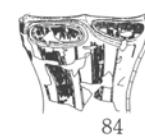
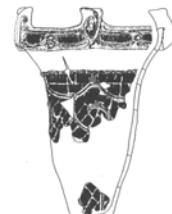
県内の当該期遺跡としては、三原田遺跡、大平台遺跡、曲沢遺跡、清里・長久保遺跡、小町田遺跡、荒砥前原遺跡、荒砥二之堰遺跡等が知られている。このうち後4遺跡は報告書も既刊であり小町田遺跡以下の3冊には、土器の編年観が提示され、特に荒砥前原遺跡報告は、主体土器が当遺跡のものに近い、検討方法が本稿とほぼ同じであることから、参考になった。

ここで本論に入る前に、筆者の加曾利E式に対する立場を明らかにしておきたい。加曾利E式については、山内清男博士以来諸先学によって多くの論考がなされ、大筋での編年的位置づけは確立されたものと思われる。しかしその内容の一部及び型式呼称は、今だに混乱しているのは周知の事実である。本稿では、その型式呼称について、能登 健氏・戸田哲也氏等の提唱された、ほぼ胴部磨消し帯の出現を境にして前後に分け、さらに各2細分して1～4のアラビア数字をあてて表記する立場に立って進める。しかしそれぞれの型式の内容については、必ずしも戸田氏等と一致するものではなく、著者の考えである。

第1・2図及び第1表は、当遺跡遺構内出土土器の一覧であり番号は後出の図にも共通する。

Z 区 14 住	 1	A 区 43 住	 21	A 区 220 住	 22	A 区 220 住	 41	 42	 43	A 区 2号土器 器 62	 63	
Z 区 19 住	 2	A 区 219 住	 23	A 区 221 住	 44	A 区 221 住	 45	B 区 63 住	 64			
A 区 27 住	 3	A 区 211 住	 24	A 区 222 住	 25	A 区 222 住	 46	 47	B 区 69 住	 65		
A 区 30 住	 4	A 区 211 住	 26	A 区 223 住	 27	A 区 223 住	 48	 49	B 区 71 住	 66		
A 区 31 住	 5	A 区 214 住	 28	A 区 226 住	 29	A 区 226 住	 30	 50	B 区 156 住	 67	 68	
	 6	A 区 214 住	 31	A 区 227 住	 32	A 区 227 住	 51	 52	B 区 70	 70		
A 区 31 住	 7	A 区 216 住	 33	A 区 228 住	 34	A 区 228 住	 53	 54	B 区 165 住	 71		
	 8	A 区 216 住	 35	A 区 229 住	 55	A 区 229 住	 56	 57	Z 区 1 埋	 72	 73	
A 区 32 住	 15	A 区 217 住	 36	A 区 229 住	 37	A 区 229 住	 58	 59	Z 区 2 埋	 75		
A 区 34 住	 16	A 区 218 住	 38	A 区 219 住	 39	A 区 219 住	 40	A 区 1号土器 器 60	 61	Z 区 3 埋	 76	
	 17	A 区 218 住	 41	A 区 219 住	 42	A 区 219 住	 43	A 区 2号土器 器 62	 63			

第1図 遺構内出土土器一覧(1)

Z区 4埋		A区 10埋		Z区 124坑		A区 240坑	
Z区 5埋		A区 11埋		Z区 150坑		B区 101坑	
Z区 6埋		A区 17埋		A区 25坑		A区 43坑	
A区 1埋		B区 8埋		A区 44坑	 	B区 144坑	 
A区 4埋		A区 2号炉		A区 112坑		B区 149坑	
A区 5埋		Z区 5坑		A区 188坑	 	B区 155坑	 
A区 7埋		Z区 81坑		A区 210坑		I区 156坑	   
A区 8埋							
A区 9埋							

第2図 遺構内出土土器一覧(2)

第1表 出土状態一覧

1	P;東側覆土中層	30	覆 土	59	覆 土	88	屋外埋甕	逆位
2	炉体土器	31	炉体土器	60	覆 土	89	屋外埋甕	正位
3	炉体土器	32	倒置甕	61	覆 土	90	屋外埋甕	正位
4	炉体土器	33	屋内埋甕	62	覆 土	91	屋外埋甕	逆位
5	西寄り床直	34	覆 土	63	覆 土	92	土坑底面直上	
6	中央床直	35	炉体土器	64	炉体土器	93	土坑底面直上	
7	北側壁溝内	36	覆土下層	65	屋内埋甕	94	土坑底面直上	
8	西側柱穴上面	37	覆土下層	66	炉体土器	95	覆 土	
9	北側柱穴横床直	38	覆土下層	67	南側ピット上面	96	覆 土	
10	中央西寄り床直	39	覆土下層	68	炉 内	97	覆 土	
11	覆土中層	40	炉体土器	69	覆 土	98	覆 土	
12	炉 付 近	41	炉体土器	70	炉体土器	99	覆 土	
13	炉北側床直	42	屋内埋甕	71	屋内埋甕	100	覆 土	
14	南側壁溝内	43	屋内埋甕	72	炉体土器	101	覆 土	
15	炉体土器	44	炉体土器	73	屋内埋甕	102	土坑底面直上	
16	炉体土器	45	屋内埋甕	74	屋外埋甕	103	覆 土	
17	炉体土器	46	炉体土器	75	屋外埋甕	104	覆 土	
18	床 直	47	炉体土器	76	屋外埋甕	105	覆土中層	
19	床 直	48	炉体土器	77	屋外埋甕	106	覆 土	
20	重複土坑内か?	49	屋内埋甕	78	屋外埋甕	107	覆 土	
21	炉体土器	50	炉体土器	79	屋外埋甕	108	覆 土	
22	覆土下層	51	炉体土器	80	屋外埋甕	109	覆 土	
23	床 直	52	屋内埋甕	81	屋外埋甕	110	覆 土	
24	炉体土器	53	屋内埋甕	82	屋外埋甕	111	覆 土	
25	屋内埋甕	54	屋内埋甕	83	屋外埋甕	112	覆 土	
26	屋内埋甕	55	炉体土器	84	屋外埋甕	113	覆土中層	
27	屋内埋甕	56	炉体土器	85	屋外埋甕	114	覆土中層	
28	炉体土器	57	屋内埋甕	86	屋外埋甕	115	覆土中層	
29	覆 土	58	覆 土	87	屋外埋甕	116	覆土中層	

2. 出土土器の分類（第3図）

出土土器の分類にあたっては、口縁部文様帯と胴部文様帯のあり方、及びその構成要素を基準にI群～IX群に分類した。これらがI～IXと時間的に推移すると考えたものではなく、あくまでも文様の変化する方向性としてとらえたものである。また、系統関係を追うことのできる土器群が存在するが、これについては機会を改めたい。以下各群の分類基準及び特徴を列記する。

I群 口縁部文様帯・頸部無文帯・胴部文様帯の3帯構成をとるものである。58・62は、地文は撚糸で、頸部無文帯と胴部文様帯の区画は、半截竹管を用いた3本単位の平行沈線である。62の頸部は、2単位のアヤクリ状隆帯で縦区画されている。95は、4単位の口縁突起を有し、口縁部文様帯は、縦沈線を充填した楕円区画と「S」字沈線の組み合わせである。胴部文様帯は、上下2段に2種の原体を使いわけている。主文様は、2本の隆帯の渦巻文を横に連結している。この胴部文様は、隆帯と沈線の違いはあるが58に共通する要素である。器形と文様の明確にわかる例は、この3例だけである。この中で95の土器の3帯構成のあり方と文様要素は、58・62に比較してより定型化したものとみられ、II群に比較的近い位置に置くことができる。⁽³⁾

II群 I群同様口縁部文様帯・頸部無文帯（素文帯）・胴部文様帯の3帯構成をとるもので、胴

部文様帯と頸部無文帯の区画は、2～3本単位の平行沈線である。口縁部文様帯には、5・23のように楕円区画と沈線による渦巻の組み合わされたものと、沈線の渦巻の相互に連結されたもの、22のように楕円区画だけで構成される3種があり、口縁部文様帯は、I群に比較して平面化し、定型化が進んでいる。

III群 頸部無文帯が消失し、口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成をとる。口縁部文様帯と胴部文様帯との区画は、隆帯で明確に行っている。口縁部文様帯は、71・108のような楕円区画と沈線の渦巻の組み合わされたもの、70・103のような楕円区画と渦巻の連結したもの、6のような楕円区画だけで構成される3種の他、15・40・55のように全く違った文様構成をもつものが加わる。胴部文様帯は、隆帯または沈線の懸垂文が基本である。

IV群 口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成をとり、胴部文様帯中懸垂文間が磨消し帯または無文帯となるもので、口縁部文様帯と胴部文様帯の区画は、隆帯または幅広の沈線で明確に行っている。口縁部文様帯は、26のように楕円区画と沈線と渦巻の組み合わされたもの、18・41・80のように楕円区画と渦巻の連結したもの、36・65のように楕円区画だけで構成される3種がみられる他、III群同様、2・85のように違った構成をもつものがある。

V群 口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成をとるもので、口縁部文様帯区画は、隆帯から幅広の沈線が主体となり、胴部文様帯との区画は不明確化している。口縁部文様帯には、II～IV群同様、44のような楕円区画と沈線の渦巻の組み合わされたもの、45・102に代表される楕円区画と渦巻の連結したもの、84のような楕円区画だけで構成される3種がみられる。また、口縁部に小突起を有する土器がみられる。

VI群 口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成をとり、胴部文様帯中の縄文帯と無文帯を区画する沈線上端が連結し「匂」字状の文様構成となるもので、上端の蕨手状となる懸垂沈線が加わる。口縁部文様帯の構成は、出土資料が少ないこともあり、楕円区画と渦巻の連結されたものだけである。81は以上の概念に直接当らない「胴部隆帯文」と呼称されているものである。19は他と全く文様構成の異なるものである。

VII群 口縁部文様帯が消失し、胴部文様帯だけで器面の構成されるものである。67・100のように口縁部に沈線を廻らし、口縁部に無文帯を有するものと、114・116のような口縁部無文帯をもたないものがみられる。胴部文様は「匂」字状の沈線を基本として、間に蕨手状沈線の加えられるものがある。また、113のように前二者と全く異なる文様構成をとるものがみられる。

VIII群 VII群同様胴部文様帯だけで器面の構成されるものであるが、VII群と違って胴くびれ部を境として、胴部文様が上下に分割されている。また、VII群の一部にみられるように、口縁部に1本の沈線を廻らし、口縁部無文帯を形成している。形の窺い知るのは、68、1例だけである。

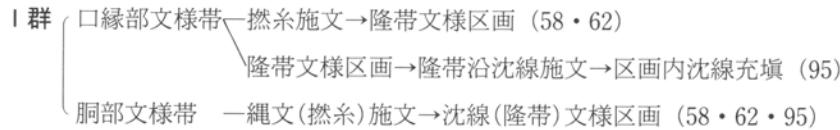
IX群 胴部文様帯だけで構成されるもので、文様区画要素に断面三角形状の微隆帯が加えられたものである。これには沈線で同様の文様構成をとる土器があるが、適當な資料がみあたらない。

以上、文様構成要素を主にその基準として、分類を行った。その結果から各群の違いについて

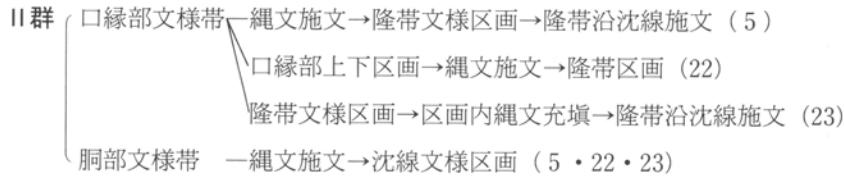
整理すると、I群とII群は定型化の度合、II群とIII群は頸部無文帯の有無、III群とIV群は胴部文様帯中の磨消し帯（無文帯）の有無、IV群とV群は口縁部文様帯と胴部文様帯間の区画の有無、V群とVI群は胴部文様帯中の懸垂文上端の連結の有無、VII群は口縁部文様帯の有無、VII群とVIII群は文様構成が1段か2段か、VIII群とIX群は微隆帯区画の有無とすることができる。この文様分類は、荒砥前原遺跡報告における分類中、I類=II群、II類=III群、III類の一部=IV群、III・IV類=V群、V類=VI群、VI類=VII・VIII群、VII類=IX群という対応が考えられる。

3. 文様施文順序（第3・4図参照）

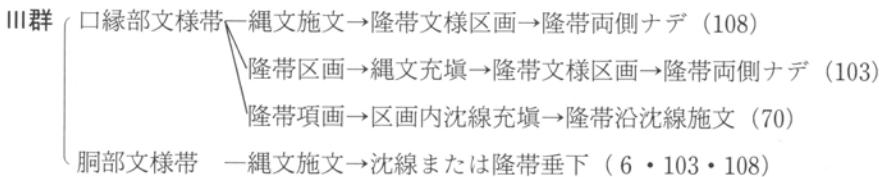
文様施文順序については、口縁部文様帯と胴部文様帯に分けて検討し、その特徴を抽出する。



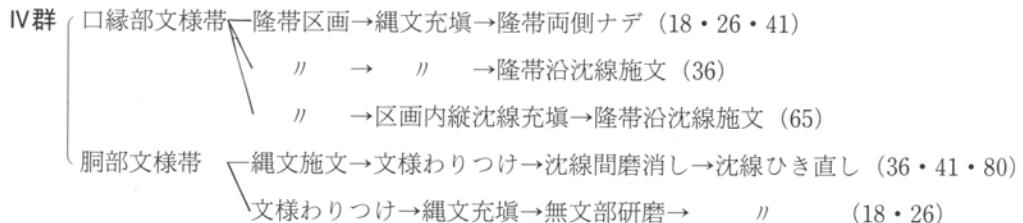
I群は、口縁部文様帯施文に2種がみられるが、3例中2例は先に縄文施文を行なうものであり基本は口縁部文様帯及び胴部文様帯共に、縄文施文→文様区画という施文順序である。



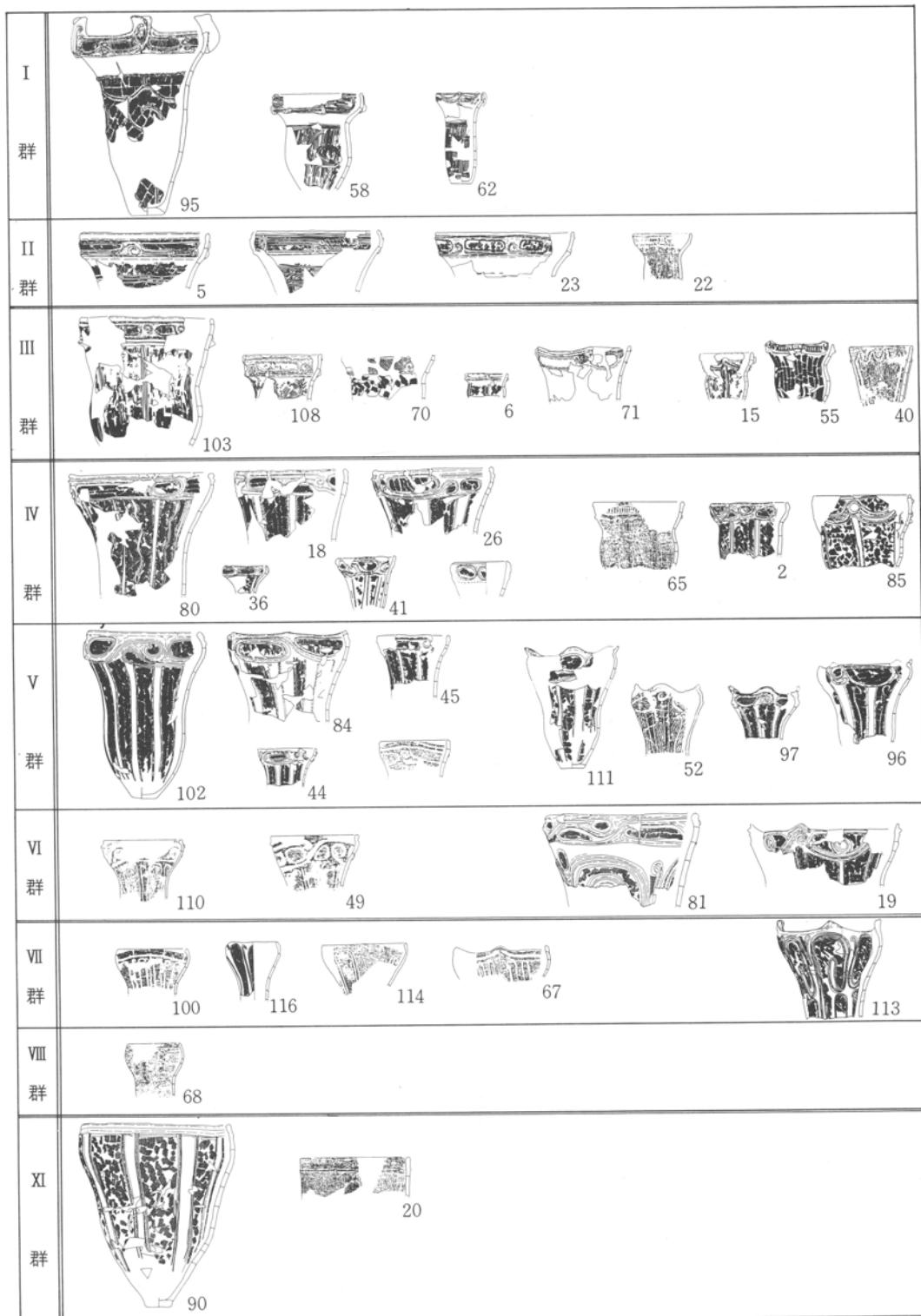
II群もI群同様、3例中2例が口縁部文様帯・胴部文様帯共に、縄文施文→文様区画という施文順序であり、主体となるものと考えられる。



III群も基本的には、I・II群同様口縁部文様帯・胴部文様帯共に、縄文施文→文様区画という施文順序である。I～III群を通して区画内に平行沈線を施文するものは、充填技法を用いている。

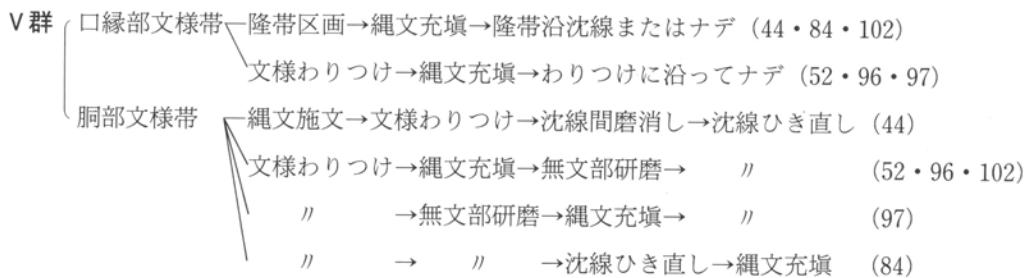


IV群は、口縁部文様帯については基本的に、隆帶区画→区画内縄文充填という順序で、胴部文様帯には、磨消し技法と充填技法の2種が併存し、同一の効果を生み出している。磨消し技法は、II・III群にみられた胴部懸垂文の延長線上にある施文順序であるが、充填技法は、手ぬきの方向

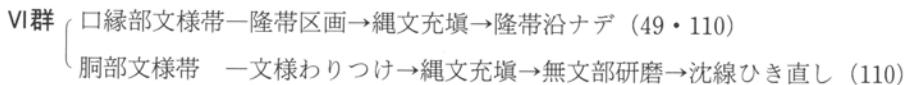


第3図 深鉢文様分類

をはかったものと思われ、技法的に後出である。また、この磨消し縄文技法の出現によって、縄文が主文様要素の一方の極としての位置づけとなつたことは、多く指摘されていることである。



V群は、基本的にIV群と同様の傾向を示すが、胸部文様帯における磨消し技法が、44の1例を除き全くみられないところが大きな違いである。また、充填技法においても多くのバラエティがみられることも特徴としてあげることができる。



VI群では、資料が少ないこともあるが、1つのパターンしかみられなかった。この施文順序は、V群で主体となっているものと同様である。

VII群—VIII群 一文様わりつけ→縄文充填→無文部研磨→沈線ひき直し (67・100等)

VIII群 〃 一 〃 → 〃 → 〃 → 〃 (68)

VII・VIII群は、VI群同様典型的な充填技法の施文順序である。また、V群からみられる蕨手状沈線または波状懸垂文は、最終段階で施文されるものと思われる。

IX群 胸部文様帯

```

graph LR
    A[文様わりつけ→縄文充填→無文部研磨→微隆帶貼付]
    A --> B[口縁部無文帶微隆帶区画→文様わりつけ→縄文充填→無文部研磨→沈線]
    B --> C[ひき直し]
    C --> D[20]
  
```

IX群も基本的に充填技法であるが、沈線文様区画から微隆帶文様区画への変化が大きな特徴である。

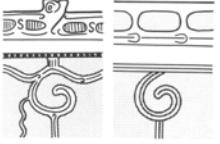
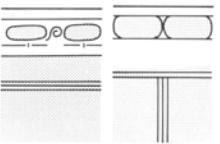
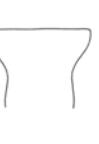
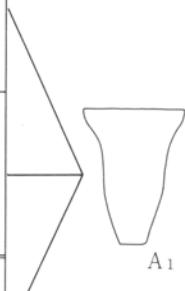
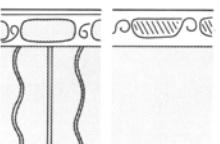
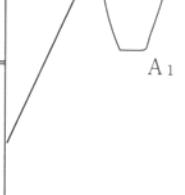
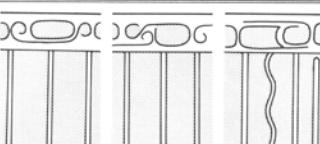
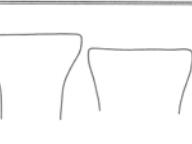
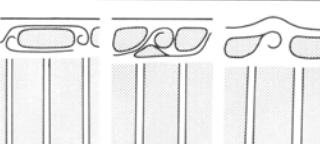
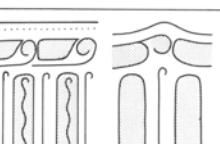
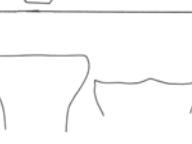
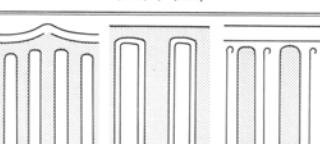
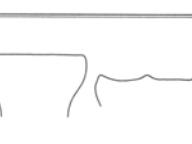
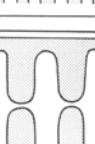
以上 I ~ IX群の施文順序について述べたものをまとめると、I ~ III群までは、口縁部文様帯・胸部文様帯共に縄文施文→文様区画を基本としているのに対して、IV~IX群では、口縁部文様帯においては、文様区画→縄文充填となり、胸部文様帯では、磨消し技法→充填技法への変化がみられる。このことは、荒砥前原遺跡報告で「胸部の磨消縄文技法をとび越えた充填縄文手法の登場は、その変遷がスムーズでなく、大きなヒアタスが存在」と指摘した部分を、当遺跡におけるIV群が埋めるものと思われ、当遺跡においては、IV群→V群へと技法的にスムーズな流れがとらえられる。また、区内充填技法は、口縁部文様帯に先行してみられ、その出現はII群内に認められる可能性があるが、1例であり縄文の再施文とする見方もある。

4. 文様分類と器形変化（第4図）

器形は、文様に比してより器としての機能・用途と密接な関係にあり、その器形変化は、文様の変化に比して緩慢であることは容易に想像することができる。しかし土器には、大小のバラエティがある他、装飾的意味の強い口縁突起・把手・隆帯等が付加される場合が多く、非常に複雑化しているように見える。そこでここでは、基本プロポーションを比較するため、口縁部大突起等を除去した形で、口径を合わせて文様分類に沿って比較を試みた。第4図中「器形バラエティー」としたのは、同一群中における器形の違いを示したものである。「プロトタイプ」としたのは、それぞれの群を特徴づけると思われる器形を抽出したものである。さらに各群の器形構成の要素から、A₁～A₄の器形をとらえ「器形変化」として各群との関係をみた。

- I群 口縁部はやや外反し、頸部のくびれも強くなく、胴部の張りは弱い。
- II群 I群と基本的に近似し、わずかに口縁部が直立する傾向がある。
- III群 頸部のくびれはやや弱く、口縁部は直立傾向がやや強い。また、直線的に外反するものと同形態で口縁が波状を呈する2種がある。
- IV群 口縁部は、わずかに内湾傾向を示し、胴部の張りは弱い。
- V群 口縁部は、IV群と比較して内湾傾向は強く、4単位の小突起を有するものと、波状口縁の2種が加わる。
- VI群 口縁部の内湾は、V群と同程度で、V群同様4単位の小突起を有するものがみられる。
- VII群 V・VI群とほぼ同一傾向を呈する。
- VIII群 口縁部の内湾傾向は、V～VII群と比較して強い。
- IX群 // やや緩慢で、胴くびれ及び胴部の張りは比較的弱く、底部は突出する。

ここで検討の対象としたものは、基本的にいわゆるキャリパー形と呼ばれる器形を同一規範として有している一群の土器であり、口縁形状に若干のバラエティーがみられるが、その器形変化は、口縁部の内湾傾向及び底部の突出傾向としてとらえることができる。ここでA₁～A₄の基本プロポーションと各群との関係をみると、A₁はI～III群の一部、A₂はIV～VI群、A₃はV～VII群、A₄はIX群との関係が顕著である。特にA₂とA₃がIV～VII群の間で3～4群にわたってその器形が併存するということは、文様と器形の関係において、文様に規定されて器形が変化するものではないことを如実に示すものと考えられる。また、A₂とA₃が、V・VI群でオーバーラップしてみられるものの、A₂はVII・VIII群にはみられず、逆にA₃はIV群に顕著でないことは、IV～VII群が、A₂～A₃という器形変化時間幅の中に共存するものの、これが2分される可能性を示唆している。III群の器形は、一部A₁に近似するものもみられるが、中にIV群との共通要素も有しており、器形的にも中間的色彩が強い。

	文 様 模 式	器形バラエティー	プロトタイプ	器形変化
I 群				
II 群				
III 群				
IV 群				
V 群				
VI 群				
VII 群				
VIII 群				
IX 群				

第4図 器形比較図

5. 各群の共伴関係（第2表）

第2表は、当遺跡及び県内報告例から、I～IX群に該当する土器の共伴事例についてみたものである。この表からI群とII群の共伴は、小町田遺跡120住1例が認められるだけであるが、II群とIII群の共伴は、当遺跡A区31住・清里・長久保遺跡13区2住、小町田遺跡20住の2地域3例と増す。また、III群とIV群の明確な共伴例は、管見では知ることができなかった。こうした共伴例がある一方で、I～III群は単独に近い状態の土器構成の認められる例がある。例えばI群—当遺跡Z区100号土坑、小町田遺跡119住、竹沼遺跡B J—1住、II群—当遺跡A区43住・209住・214住、III群—当遺跡B区164住・144号土坑・A区188号土坑等であり、いずれも類例が多いとは言えないまでも、2地域以上にまたがっていることから偶然の所産とは考え難い。したがってI群とII群、II群とIII群の共伴及び各群の単独出土例は認められるが、I群とIII群の明確な共伴例は認められない。IV～VIII群については、IV群の単独出土と思われる例は、清里・長久保遺跡B区5住、久森環状列石遺跡7住等でみられるが、ほとんどの場合V～VII群との共伴がみられ、特にVI群との共伴例が顕著である。また、荒砥前原遺跡D区1住ではIV～VI群、荒砥二之堰遺跡16住では、IV～VII群の共伴が認められる上に、荒砥前原遺跡4T2住では、V～VIII群、同4T4住・荒砥二之堰遺跡19住では、V～VI群の共伴が確認されている。つまりIV～VIII群は比較的短い時間幅の中に収まる土器群である可能性が強い。しかしIV群とVIII群の明確な共伴例は認められておらず、IV～VIII群が完全に1時期のものではなくて、少なくとも2時期に分離が可能と考えられる。つまりIV～VII群で構成される一時期と、V～VIII群で構成される一時期ということであり、それぞれの構成主体は、前者がIV群、後者がV群にあるものと考えられる。IX群は、空沢遺跡J H 3住でVI群と、荒砥二之堰遺跡19住でV～VII群と共に伴する例が認められるが、ほとんどの場合は、さらに後出の土器群との共伴例、または荒砥前原遺跡C区3住、荒砥二之堰遺跡20・21住例のように単独出土例が主である。また、VIII群との共伴例は明確にとらえることができないことなどから、IV～VIII群とは、若干の時間的ズレが感じられる。

第2表 各群共伴事例一覧

遺構名	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	遺構名	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
国分寺中間A 31住	○	○								小町田 20住	○	○							
〃 A 34住			○	○						〃 21住			○	○					
〃 A223住			○	○						〃 25住			○	○	○				
〃 A227住			○	○						〃 120住			○	○					
〃 B156住					○	○				空沢 J H — 3住									
長久保13区—2住	○	○								荒砥二之堰 9住			○	○	○				
〃 —8住			○	○						〃 12住			○	○					
荒砥前原C区11住			○	○						〃 14住			○	○	○				
〃 C区12住			○	○						〃 16住			○	○	○				
〃 D区1住			○	○	○					〃 17住			○	○					
〃 3T1住			○	○						〃 19住			○	○	○				
〃 4T1住			○							〃 22住			○						
〃 4T2住			○	○	○	○				〃 24住			○						
〃 4T4住			○	○	○														

6. 時期の設定

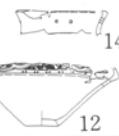
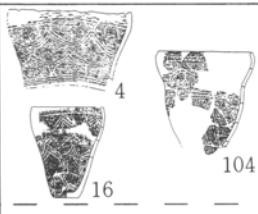
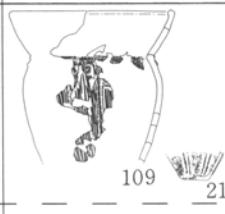
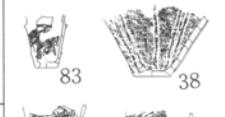
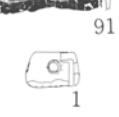
各群共伴関係の検討から、各群は、I群→II群→III群→IV～VII群→V～VIII群→IX群という時間的推移が想定される。ここで当遺跡B区156住とI区156号土坑の2例について検討しておきたい。この2例は、前者がVII群とVIII群の共伴、後者はほぼVII群だけで構成されている。他に清里・長久保遺跡13区11住が近い様相を示すものと思われるが明確でない。例はこの2例にすぎないが偶然の所産とは考え難いことから、当遺跡では、IV・V群主体の時期からIX群への流れの中に、ごく限られた時間幅とはいえ、VII・VIII群で構成される時期があることが考えられる。したがって当遺跡ではI群(58・62)、I群(95)・II群、III群、IV～VII群、V～VIII群、VII・VIII群、IX群という7期を設定することができる。次に文様・施文順序・器形の分析を総合して1～7期の画期を求めるとき、II群とIV群の間(III群は中間形態)に最も顕著な違いをとらえることができる。つまり2期と4期の間に画期を求めることができ、これにより1・2期と4～7期に2分される。さらに他の要因から各2細分し、E1～E4式に対比させると、1期=E1式、2期=E2式、3～6期=E3式、7期=E4式ということになる。また、III群はII～IV群への流れのギャップを埋めるもので、多くの面で過渡的色彩が強く、加曾利E式の前半末か後半初か、どちらとも判断しかねるものであるが、文様構成上3帶構成から2帶構成への変化は、IV群生成の母胎となるものと考えられ、一応後半初つまりE3式の初めに位置づけて考えておきたい。

7. 共伴異系・異種土器の位置づけ(第5図)

当遺跡では、系統の明確なものとして連弧文系・曾利系・大木系の3系統の他に、他地域の地域色を強く残した加曾利E式が若干検出されている。第2図中右寄りに図示した一部が該当するのであるが、ここでは先の3系統についてその位置づけをみてみたい。まず連弧文系は、E2式後半に出現し、その出現当初から連弧文系としての顔を明確に備えていることから、さらに先行する地域が当然想定されるが、それ以上言及できない。また、その終末はE3式の第2から第3段階で、沈線間磨消し技法の導入等若干の変質を受け、E3式第4段階までは続かないものと思われる。

次に大木系は、E1式及びE2式後半にわずかに例がみられるだけであり、107は大木8a式、64・106は8b式に対比され、E3式に1例みられる98は大木9式の中でとらえられるものと判断した。曾利系は、連弧文系同様E2式後半からE3式第3段階までの共伴がみられ、曾利IV～V式に対比されるものであろう。

これら3系統の土器は、いずれも客体的な存在であり、当遺跡では屋内外の埋甕または炉体土器として検出された例が多く、比較的純粹な姿を止めて存在している。また、当遺跡を含め荒砥前原遺跡、荒砥二之堰遺跡、小町田遺跡、清里・長久保遺跡などの位置する、中央平野部においては、いずれの系統もその土器構成に占める割合は、非常に低く、近県にみられるように、異系統の一部が主体的となるような時期はないようである。しかし、他県との隣接地域である長野原町

	連弧文系	曾利系	大木系	異種
E1			 107	
E2	 7 35		 106  64	 13  14  12
E3	 4 104 16  109 21	 83 38  73 79  56 82  75	 98	 32  39  91  99  43  115

第5図 各期別異系土器及び異器種一覧

勘場木遺跡では、当遺跡2期にあたる住居出土土器構成は、曾利系が主体であり、加曾利E式系統の土器は非常に少ない。また、藤岡市株木遺跡では、当遺跡3期にあたる住居出土土器構成に占める連弧文系の割合が高く、先述の中央平野部のあり方とは異なった様相を呈している。

次に異種土器については、浅鉢・台形土器・ミニチュア・両耳壺等がわずかに出土しているにすぎない。したがってここでは、加曾利E式の編年の中に位置づけるに止めたい。

8. おわりに

以上当遺跡出土土器について、文様・施文順序・器形・共伴関係の検討を通して加曾利E式の中に位置づけを試みた。その結果当遺跡出土土器の大半は加曾利E3式の中でとらえられるものと考えるにいたった。また、その土器構成から、E3式が当遺跡においては4段階の変遷をした可能性を指摘した。特に第4段階つまりVII・VIII群で構成される時期の設定は、多く異論を唱えら

れているところであり、当遺跡の局所的現象である可能性もあることから、引き続き課題として検討していきたい。

末筆ながら本稿を執筆するにあたり、海老原郁雄・小島弘義・小渕良樹・芹沢清八・石坂 茂・藤巻幸男・木津博明の各氏に、資料提供及び方法論等の御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 早期条痕文、前期黒浜式、浮島式、諸磯b・c式・中期阿玉台式・勝坂式、後期称名寺式・堀之内式・加曾利B式・安行式・晚期水式等の土器がわずかながら出土しており、このうち遺構単位でとらえられたのは、諸磯c式・勝坂式・称名寺式である。
- (2) 能登 健氏は、「縄文文化解明における地域研究のあり方—関東地方加曾利E式土器を中心として」と題する論文中で、戸田哲也氏は、「縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器との関係について—」というシンポジウムの席上において、E1～E4のあて方にについて提案がなされているが、その後これに呼応している例はあまり知見にのぼらない。しかし先史土器図譜解説等の文脈からは、両氏の提唱が的を得ているように感じられるので両氏の提唱にしたがった。
- (3) 本来はII群の中で扱っていかなければならない土器なのかもしれない。
- (4) 小渕良樹氏の御教示によれば、埼玉県狭山市宮地遺跡の住居出土土器の中に、本稿中II・III・IV群とした3群の明確な共伴事例があるということである。
- (5) 当遺跡IV群つまり4期の段階では、本来的な連弧文系のものと、沈線間を磨消す2種が存在し、その後に明確な形では続いているいかないようである。

参考文献

- 山崎義男『群馬県長野原町勘場木石器時代堅穴住居址について』みやま文庫中再録
渋川市教育委員会『空沢遺跡』渋川市発掘調査報告書III 1978
藤岡市教育委員会『F₁竹沼遺跡』1978
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『小町田遺跡』1984
藤岡市建設部・藤岡市教育委員会『B4株木遺跡』1984
群馬県教育委員会・財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥前原遺跡・赤石城址』1985
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥二之堰遺跡』1985
吾妻郡中之条町教育委員会『上沢渡遺跡群』中之条町発掘調査報告書第4集 1985
財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『清里・長久保遺跡』1986
渋川市教育委員会『空沢遺跡第6次 MN地点発掘調査報告書』渋川市発掘調査報告第10集 1986
群馬県教育委員会・財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本鉄道建設公団『下佐野遺跡II地区(1)』上越新幹線埋蔵文化財調査報告第6集 1986
岡本 勇「横須賀市吉井城山第1貝塚の土器(2)」『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第7号 1963
山内清男『日本先史土器図譜』先史考古学会 1967
堀越正行「加曾利E III式土器研究史」『信濃』24-2～4 1972
能登 健「縄文文化解明における地域研究のあり方—関東地方加曾利E式土器を中心として」『信濃』27-4 1975
笠森健一『志久遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第31集 1976
新藤康夫「加曾利E式土器細分の再検討」『考古学雑誌』62-3 1976
白石浩之「加曾利E式土器の変遷」『考古学研究』25-1 1978
谷井 彪「加曾利E II式土器の観書」埼玉県立博物館記要5 1978
宮崎朝雄「加曾利E式土器について—埼玉県出土土器を中心に—」『奈和』17 1979
神奈川考古同人会「縄文中期後半の諸問題—加曾利E式と曾利式土器との関係」『神奈川考古』10 1980
小林達雄ほか「シンポジウム—北関東を中心とする縄文中期の諸問題」日本考古学協会 1981
海老原郁雄「原始・古代」『上河内村史』上巻 1986